

情動と運動文化

鬼 丸 正 明

0. 視座及課題の措定

0-1. 運動文化 *Cultur Motus* ——この一見ノンセンスな、しかし、現在、史上かつてないほど普及・発展している文化装置。

われわれは、この運動文化の人間にとってもつ意味の解明を理論的課題とし、そのために先ず「遊戯—労働」図式を措定し、その遊戯性の全面的顕現を自らの実践的立場とする。

0-2. その実践的立場に立つ時、運動文化の可能性を抑圧し疎外するもの、それは、権力 *Macht, pouvoir* の存在である。

それ故に、権力—運動文化構造を理論的に把握し批判することは、実践的立場から焦眉の課題というる。

0-3. しかし、遡って考えるに、運動文化は常に権力と関係してきた。それ故に、権力—運動文化構造の解明は、人間にとっての運動文化の意味の解明に於ても要諦をなすと预料しうる。

ここに於て、「遊戯—労働」図式の「遊戯—労働—権力」図式への拡大、これが要請される。

われわれは、「遊戯—労働—権力」図式を運動文化への視座として措定し、権力—運動文化構造の解明への初発的考察を、特に原理的次元に於て行うことを本稿の課題として措定する。

1. 権力—運動文化構造と統合機能

1-1. われわれは歴史の中で運動文化が、特に資本主義社会に於てスポーツが愛国心・愛校心のために利用され、そのために文化としての発展が疎外された実例を数多く知っている。解明に先立ち、われわれは先ず巨視的次元から

この「疎外態」に注目し、それを権力—運動文化構造、以下では特に権力—スポーツ構造における「擬似共同性」⁽¹⁾の発生として先ず規定し、それについて考察を加えたい。

個人がスポーツを介して社会の価値・規範を内面化するという事実については従来「社会化」⁽²⁾、特に“Socialization via sport”についての研究によって指摘されてきた。

例えば藤原健固は、アンケート調査の結果、スポーツは協調性を高め集団の団結を強めるという意識を解答者の7—8割がもっていたという事実から「スポーツ集団は個人にとって社会規範と価値の補強を現実のものとする主要な源泉であり、個人と社会を結びわめて重要な媒介項としての機能を果し得る」⁽³⁾という結論をだしている。

社会化論が権力—スポーツ構造の一側面を微視的次元で分析しているとする、それを巨視的次元で分析しているのが「統合 Integration」論だといえる。

そこで「社会統合は大部分が文化受容と構造的同化を通じて起るので、スポーツ組織は個人が主要かつ支配的な集団の社会制度に十分に参加していると実感する手段を提供する」⁽⁴⁾と理解されている。また、Bouet は、1364人へのアンケート調査から統合が一旦成立すると「勝利への衝動は集団への強い愛着と帰属の感情と結びつく」⁽⁵⁾と論じている。⁽⁶⁾

しかし、以上の社会化論、統合論は社会システムの均衡を前提としているため、権力の視座が弱い。影山らは「社会化」論について、それが社会化の内実を問わぬ限り、既存のスポーツ文化の内面化を唯一の基準とする体制科学となると正当に批判しているが、⁽⁷⁾このことは「統合」論についても妥当する。

1—2. このような統合論に対して Wohl は、「統合」は「不統合」との弁証法的関係において動態的に把握すべきだとしている。⁽⁸⁾

しかし、統合機能の背後に存在する権力の諸相に批判的考察を加えているのは Bohme らである。⁽⁹⁾

彼らは「スポーツ活動とスポーツクラブは、そこに参加する人々に共通の連帯感をいだかせる。しかしだからといって、それがさらに政治や経済の分野におよぶわけではないから、偽りの意識を作る手段といえる」と把握し、そして例えば企業内でのスポーツは「共同社会的雰囲気」^{ゲマインシャフト}を生みだし「多くの資本家は、この企業内スポーツが統合の機能をもつことをはっきり見抜いている」こ

と、サッカー場では労働者の中に「支配層との情緒的一体感」が生じること、又軍隊内でも「兵士のスポーツ競技会の最大の意義は身体鍛練の価値にあるのではない……むしろ帰属意識を育てることにある⁽¹⁰⁾」ということを経隊当局側が的確に把握していることを述べている。

Böhme らのこの把握は、権力—スポーツ構造に於て、情緒的一体感や共同社会的雰囲気が発生すること、そしてこれをこそ権力は「統合」のために利用することを指摘している点に於てきわめて重要である。

1—3. 以上でわれわれは、権力—スポーツ構造に於て擬似共同性が実在すること、そしてそれは「統合」の場に於て発生することを確認しえた。

では、この擬似共同性の実体は何であり、それは如何にして発生するのか？この問は残念ながら未だ答えられていない。

というのも従来の権力—スポーツ構造の批判的研究は殆どが権力分析・批判に終始し、そこにとどまっていたからである。

しかしそれでは何故に権力があれほどスポーツを利用したがるのか、把握しえないのである。

それ故にわれわれは、スポーツの側にも権力に利用されやすい性格（例えばここでの擬似共同性）があるのではないか、スポーツの側に擬似共同性を生み出す源泉があるのではないかと予想する。

そしてこのことはスポーツ社会学の分野でも気づかれてはいたものである。例えば Wohl は「遊戯と運動遊戯に伴う情緒的雰囲気は……遊戯参加者を互いに親密にさせる⁽¹¹⁾」とし、このことは運動遊戯の一形態たるスポーツに於ても全く同じであり、むしろ「(スポーツの——引用者)競争性は遊戯の情緒的雰囲気を最大限に高める⁽¹²⁾」としており、またスポーツの統合機能はこれに由来すると述べてもいる。

しかし、この情緒的雰囲気が何であるかについては何も述べられていないのである。

繰返そう。

権力—スポーツ構造における擬似共同性の実体は何であり、それは如何にして発生するのか？

われわれはこの疑問に答えるためにスポーツ社会学の次元をはなれ、原理的次元に下向すべきである。

2. 情動と融合機能

2—1. 運動文化とは身体を動かす文化である。とすれば、問の解答は身体にあるのではないかと先ず考えるのは自然である。

身体を動かす。しかしそれだけならばわれわれは日常的に身体を動かしている。女性と愛の語らいをしていても、寒風ふきすさぶ寮の中で一人論文を書いている身体を動かしている。そこで日常世界の身体と非日常世界＝運動文化のそれを概念的に区別する必要が生じる。それ故われわれは「身体文化—運動文化」図式を措定する。

身体文化という概念は、従来、Körperkultur, Физическая культура の訳語であり、それは、「身体養生の領域での社会的遺産の複合体、即ち技能 Leistung を高め、衛生を改善する体系的に適用された全ての手段の複合体」⁽¹³⁾ であり、「直接的な実用目的性から自由な、人間身体の運動」であると定義されようと、「社会的活動であり、肉体の全面的発達⁽¹⁴⁾の、そして生活への人間の肉体的準備の創造の成果」であると定義されようと、先の図式における運動文化に近い概念として規定されているものである。しかしわれわれは、身体文化とは語の勝義において身体^の文化であり、身体^における文化であり、この身体は日常的身体である点に於て、また身体文化—運動文化図式によってこそ双方の dynamisch な関係が把握されうと考える点に於て身体文化を先の意味に解し、それは「姿勢」であり、「身体に内面化された対自然・対社会関係」⁽¹⁵⁾ であるとして規定する。

では以上のように図式を措定した場合、われわれは運動文化における身体を如何に把握すべきであろうか？ そこに擬似共同性の実体は存在するのであるか？

従来の体育原理においては身体は専ら生理学の知見に基づいて理解されてきた。つまり、人間の機能を表象—象徴機能と感覚—運動機能に峻別し、スポーツは双方を同時に発達させる文化であると賞揚して終わってしまう⁽¹⁶⁾、のが一般的であったのである。

これに対して例えば Wohl は、運動学と精神科学を統合させる試みと称される書物⁽¹⁷⁾に於て、人間の身体運動は労働によって特徴づけられ、そのため言語と密接に結びついている、「認識体系としての言語—記号—体系が発達してはじめて、運動の恣意性の広範な発生が可能になった」⁽¹⁸⁾ のであり、この恣意的運

動こそ人間の自然への支配を拡大したのだ、つまり自由を拡大したのだと説いている——Wohl に於てはこの恣意的運動という考え方が、普遍化された運動という考え方につらなっていくのである——。

この Wohl の試みは、表象—象徴機能と感覚—運動機能との相互関連に於て身体を把握している点で貴重な試みといえる。が、しかし表象—象徴機能と感覚—運動機能のみに於て身体を把握している点に於てやはり従来の図式の中にあると言いうる。この二機能だけでは擬似共同体の実体はどこにも見い出せないのである。Wohl の気づいていた情緒的雰囲気は彼の身体論からはでてこないのだ。

従来のこの図式に対して現象学に基づいた身体論が最近体育原理の分野にあらわれてきつつある。例えば、Gruppe は現象学と人間学を援用しながら「肉体とは人間の、世界に対する複合的連関」であり、「肉体的なものとは他の人間とのコミュニケーションにはいり、『関連』を結び、社会的『接触』を知覚する『媒介』⁽¹⁹⁾」であると論じている。それ自体としては先の図式を超えうることの視点も、論述がスポーツに入ると途端に消え失せる。そのため、現象学に基づく体育原理の身体論は、現時点においては判断できるレベルにないとい⁽²⁰⁾うる。

以上から、われわれは擬似共同性の実体の考察のためには体育原理の分野をはなれ、他の諸科学の知見に就く必要がある。

その知見とは、表象—象徴機能とも、感覚—運動機能とも違う第三の、そして両機能の基底をなす機能を剔抉する知見でなければならない。

そしてわれわれは、それを Henri Wallon の情動論の中に見い出すことができるのである。

2—2. 以下、Wallon の情動論を素描する。

情動とは、生後1年間の人間の活動の主要形態であり、それは混淆性と造型性という両義的性格をもつ。

混淆性——人間は先ず、胎児の段階に於て、他者＝唯一者と全き共生状態にあり、自他未分化の融合状態にある、ところが、出生とともにズレ Différence が生じる、その苦しさから人間の運動は最初は爆発的で、無方向な運動発作にすぎない。が、次第に人間は、そのズレをうめようとして他者に向か^って働きかけようとしはじめる。そこに情動が発生する。つまり人間は自らの絶対的無

力を補うために他人の感情を自らの感情に感染させようとして情動を生み出すのである。その意味に於て情動は「個々人のあいだで取り結ばれる意識諸関係の最初の場⁽²¹⁾」なのである。これは集団に於ても同様である。つまり「情動は集団衝動を巻きおこし、個々人の意識を、ひとつの混沌とした共通精神のなかへ溶けこませてしまう⁽²²⁾」ものでもあり、逆に「集団は、その根元を各個人の身体の中にもつことにより、それ自身も一つの實在の身体のごときものとなる⁽²³⁾」のである。しかしそこでの状態は「自我と非自我の境界が消えてしまう⁽²⁴⁾」ものであるが故に融合的＝混淆的である。これを情動の混淆性という。

造型性——しかし感情交流が成立するには表現がなされねばならない。それ故に「情動の現われは本質的に言って表現⁽²⁵⁾」である。表現が成立するには「自ら」の中にズレ＝距離が存在せねばならない。表現とはその距離に基づいて自己造型する活動であり、本質的に姿勢から生ずる。姿勢こそ造型活動の基礎であり、そこでの距離の持続のなかで一切の内面性が生じる。その意味において姿勢は表象一象徴機能の源泉であり、感覚—運動機能と表象一象徴機能の媒介をなすものである。この姿勢こそ、そして情動と深く結びついているものであり「もろもろの情動は、姿勢的活動の場から生じてくるもの」であり、「情動とはこの姿勢機能⁽²⁶⁾の心的表現」なのである。

以上の混淆性、造型性を併せそなえた両義的活動として Wallon は情動を理解しているといえる。

2—3. この情動機能が支配的な段階、『場』に融合している段階を人間は次第に脱していく。それは『場』に表象一象徴体系たる『世界』を重ね合わせ、『場』を統合することによってなされる。この世界は、鏡像を介して人間が「自ら」の全体的身体像を獲得することによって成立していくのであり、この世界が他我発生⁽²⁷⁾の、人称世界発生⁽²⁸⁾の、つまり人格発生⁽²⁹⁾の基盤となるのである。

世界、即ち表象一象徴機能の成立によって情動機能は活動の主要機能たることをやめ変質する。日常生活においては情動は情感あるいは想像力へと変質し、世界を色づけている。しかし、その世界が自らの能力を超える、あるいは自らと異質な場に遭遇した場合、情動は噴出する。全く正反対の様態に於て。

その消極態に於て情動は、ひたすら場に融合しようとし世界をますます混乱させる。しかしその積極態において情動は、場に集中することによって自らの世界を破壊し、同時に場に相即しうよう世界を再構成する。

つまり、情動機能の混淆性はここでは集中力へと変質している⁽³⁰⁾のである。そしてこの集中力は他者への融合としてのそれではなく、他者との距離を生み出すものとしての集中力なのである。情動が先に造型的で混淆的な両義的活動であったのと同じように、ここでも情動は距離を生みつつ集中する両義的活動⁽³¹⁾なのである。

以上で情動論の素描を終えよう。

われわれは擬似共同性の実体を身体に求めて考察を続けてきたのであるが、この情動論の素描によって次のように推測することが許されるであろう。

擬似共同性の実体とは情動である。

情動は、身体文化が「非日常」的な身体運動と出合った場に於て、より根源的な⁽³²⁾状態で発生し人間を融合＝アナグラムに陥らせる。

擬似共同性は、その実体＝情動が権力と関係した場に於て発生する⁽³³⁾状態であり、人を融合＝凝縮させ、その時、情動の融合機能は統合機能へと転化する。

われわれは以上を仮説としてひとまずここで提出して⁽³⁴⁾おいて、次にその情動が運動文化論に於ていかに考察されてきたかみてみよう。

3. 情動と運動文化

3-1. 情動と運動文化の関係は従来、様々な形で指示・暗示されてきたと言いうる。

例えば、遊戯論に於ては、遊戯が想像的なものであり、最も強力な結びつける力であり、その本質に於て両極端に二重化していると論じられ、また、距離が遊びの最初の形式であり、遊戯的態度の本質はその不確定性、二重性、イリュージョンの志向にあると論じられている⁽³⁵⁾のも、更に遊戯と幻想 Fantasy の密接な関係が論じられている⁽³⁶⁾のも、両者の関係を論じているものと理解している⁽³⁷⁾。

そして、Wohl が遊戯は想像的要素 Phantasieelement を強くもち、文化的身体運動（→身体文化）は実用目的からはなれシンボルの内容と結びつくことによって情緒的作用をもつようになり情緒的狀態をつくり出すと論じている⁽³⁸⁾ことも、また、中井正一がスポーツ気分について考察を加え、スポーツが間隔を身体的力によって距離の性格に変え、人間の現存在からその共同存在性を開示すると論じている⁽³⁹⁾のも同様に、両者の関係の諸相を示しているのである。

また、これらの原理的考察をはなれても両者の関係の実在性は暗示されてきたのである。

例えば Sartre は情動 *émotion* を魔術のように世界を変形するものとして規定したが、この規定を一応受容して、そして運動文化の諸研究をみてみると、われわれは運動文化と魔術・呪術の関係を指摘した数多くの研究を見い出すことができるのである。⁽⁴¹⁾

われわれはこの情動論の視点をもつことによってこれらの諸研究を非合理主義として全否定することなく、むしろ運動文化のもつ融合の諸相を分析したものと「科学的」検討を加えうるのである。

そしてこれらの考察は、必然的にわれわれを運動文化と宗教との関係の原理的考察に導く。

3-2. スポーツ社会学の分野に於ても、情動論の重要性は指摘されはじめている。

Elias と Dunning は、文明化＝合理化された社会では情動が抑圧されるために、興奮をもたらす遊戯は重要な補償機能をもつとする。そして、文明化社会におけるレジャー欲求の特性は何であり、その欲求充足のために発達したレジャーイベントの特性は何かと自問し、前者についてはそれはカタルシス（アリストテレス的意味における）作用にあるのではないかと述べる。そして後者については、レジャー構造と情緒的共鳴の関係を厳密に記述することによって、つまりイベントの進展に伴う興奮の変化を記述することによって把握しうるのでないかと述べる。⁽⁴²⁾

一般にスポーツ社会学の中で最もスポーツのもつ情動性を強調しているのはスペクテーター・スポーツの研究者であろう。

このことを指摘して、Ferguson は、先の Elias と Dunning の見解をスポーツのもつオイフォリックな陶酔感によるカタルシスを指摘した点に於て評価しつつも、それだけでは一面的であるとし、Sheff の指摘したディスフォリックな不安によるカタルシスの側面と統一してスポーツを把握すべきだとする。そして精神医学の知見に拠りつつ、これらの情動論的アプローチは、スポーツが情動的抑圧を除去する能力をもつことを指摘した点に於て画期的なものであり、このアプローチはスポーツ社会学と情動社会学の双方に大きな寄与をなしうるとしている。⁽⁴³⁾ この指摘はそれ自体としては評価すべきものと言え

る。

われわれはこれらの Fergusson や Elias らと研究対象を共有するものであることをここで確認してよいであろう。

しかし、運動文化論における情動研究が権力に対する視座をもたぬ限り、なものも生みださぬこともまた、現時点で確認しておかねばならない。

運動文化の「深層」にはなにもものも存在しないのである。

3-3. われわれは以上の考察によって、権力論における情動論の不在、情動論における権力論の不在、この2つの事実を確認しえたと思う。

われわれに要請されていることは両者の複合である。つまり、権力による、遊戯の場での過剰な情動の噴出、あるいは遊戯の場での過剰な情動の噴出の背後に潜む権力、これに対する視座を失わずに考察を続けることである。そしてそのことは必ずや労働への視座の措定を要請するであろう。

しかし、われわれは、未だ実体としての情動にたどりついたばかりである。この情動が権力と関係して擬似共同性としてあらわれる構造の解明は今後の課題として残されている。

この解明はいかにしてなされるべきか？

Wallon は「この（情動の——引用者）蔓延力はあらゆる反省に先行する。……これをもっともよくしめしているのが原始民族の儀式や儀礼である。これらは彼らを情動の絶頂に到らせ……あらゆる個人的エネルギーを唯一の渦中に融合しようとするのである」と述べている。⁽⁴⁶⁾ここからわれわれは、運動文化に儀礼が発生した時、その背後で権力—運動文化構造が成立しているという仮説をつくりうるのである。

それ故に、儀礼論にもとづく権力—運動文化構造の解明、われわれの今後の課題はこのように措定しうる。

かつて Fromm は現代に残る唯一の儀礼としてスペクテーター・スポーツ⁽⁴⁷⁾をあげた。

われわれのなすべきことは、このような情動の消極態の発露にすぎない、権力と結びついた運動文化を批判し、情動の積極態の顕現たる運動文化、つまり「笑い」のメタファとしての運動文化を宣揚することなのである。

(註)

- (1) 佐伯聰夫はこの疎外態におけるスポーツを「溶融的共同性へ回帰するナショナルなもの喚起に機能する相克性としての勝利志向のみを顕現するスポーツ」として規定している。(「新しいスポーツインターナショナルリズム」中村敏雄編著『スポーツナショナルリズム』, 大修館書店, 1978年, 401頁。) われわれはこの「溶融的」という概念を離れ, 現実の共同性にもとづかぬ, 「表象」のレベルだけの偽りの共同性という意味において「擬似共同性」という概念を使用する。
- (2) Kenyon, G. S. and B. D. McPherson, "Becoming involved in physical activity and sport," Rarick, G. L. (ed.), *Physical Activity*, New York, 1973.
- (3) 藤原健固『スポーツと社会化』, 道和書院, 1976年, 153頁。しかし藤原はこの正機能とともに社会化の逆機能の存在も示している。一般に "Socialization via Sport" 研究は, スポーツ参加と社会の規範・価値の内面化が, 現実には関連をもたないことを示している。cf. McPherson, B. D. "Socialization and Sport involvement," Sage, G. and G. Lüschen (eds.), *Encyclopedia of Physical Education*, Vol. 5., Reading, Mass., 1978.
 しかし, それにもかかわらず権力は愛国心発揚, 道徳心涵養のためのスポーツ, という言説を繰返すのであり, 問題の本質はそこにこそある。
- (4) Loy, J. W., B. D. McPherson, and G. Kenyon, *Sport and Social systems*, Redding, Mass., 1978, p. 348.
- (5) cf. Bouet, M., *Les motivations des sportifs*, Paris, 1969.
- (6) Bouet, M., "Integrational Functions of Research Based on Questionnaires," *International Review of Sport Sociology*, Vol. 4, 1969, p. 134. (以下, IRSS, と略)
- (7) 影山健・今村浩明・佐伯聰夫「スポーツ参与の社会学について」体育社会学研究会編『スポーツ参与の社会学』, 道和書院, 1972年, 参照。
- (8) Wohl, A., *Soziologie des Sports*, Berlin, 1981, S. 141 ff.
- (9) Vgl. Vinnai, G., *Fußball als Ideologie*, Frankfurt, 1970; Rigauer, B., *Sportsoziologie*, Reinbek bei Hamburg, 1982; Bröhm, J. — M., *Corps et politique*, Paris, 1975; Hoch, P., *Rip Off the Big Game*, New York, 1972; 影山健・岡崎勝・水田洋編著『反オリンピック宣言』, 風媒社, 1981年。
- (10) Böhme, J. O., J. Gadow, S. Guldénpfennig, J. Jensen und R. Pfister, *Sport in Spätkapitalismus*, 2., erweiterte Auflage, Frankfurt/M., 1972, S. 87—90. 唐木國彦訳『後期資本主義社会のスポーツ』, 不昧堂, 1980年, 140—144頁。
- (11) Wohl, A., *a. a. O.*, S. 143.
- (12) Ebenda., S. 144.
- (13) Ebenda., S. 90 ff.
- (14) Пономарев, Н. И., "О теории физической культуры как науке,"

- Теория и практика физической и культуры* 4, 1974, С. 50. ソビエトにおける身代文化論については、田中良子「ソ連の身体文化論の確立をめざす三つの系譜」『体育学研究』, 第28巻第1号, 1983年, 参照。
- (15) この身体文化の概念と視点を共有するものに Mauss の身体技法 *Les techniques du corps* の概念がある。cf. *Sociologie et anthropologie*, Paris, 1950. この概念については、多木浩二『眼の隠喩』, 青土社, 1982, 参照。また、身体文化の諸相については、Douglas, M., *Natural Symbols*, London, 1970; Loux, F., *Le corps*, Paris, 1979; Hall, E. T., *Beyond culture*, New York, 1976; Богатырев, П. Г., *The Function of Folk Costume in Moravian Slovakia*, Harg, 1971. 現代社会における身体文化については、McLuhan, M., *Understanding Media*, New York, 1964; Baudrillard, J., *L'échange symbolique et la mort*, Paris, 1975. いずれも邦訳あり。
- (16) Zeigler, E. F., *Physical education and sport philosophy*, Englewood Cliff, N. J., 1977. 阿部忍・飯塚鉄雄訳『体育スポーツの哲学』, 不味堂, 1979年。
- (17) Wohl, A., *Bewegung und Sprache*, Schorndorf, 1977.
- (18) Ebenda., S. 153.
- (19) Gruppe, O., "Anthropologische Grundlagen der Leibeserziehung und des Sports," ders. (Hrsg.), *Einführung in die Theorie der Leibeserziehung und des Sports* 5., völlig neu bearbeitet Aufl., Schorndorf, 1980, S. 94 ff. Vgl. Lenk, H., u. a., *Philosophie des Sports*, Schorndorf, 1973.
- (20) 現象学, 特に Merleau-Ponty の身体論への批判については筆者の修士論文『身体と運動文化』第2章第2節参照。現象学の身体論は、身体のもつズレを無視あるいは隠蔽してしまう。それ故、それは身体にひそむ権力・暴力を看過してしまうのである。cf. Bröhm, J.-M., *op. cit.*; Foucault, M., *La volonté de savoir*, Paris, 1976; 今村仁志『労働のオントロジー』, 勁草書房, 1982年。
- (21) アンリ・ワロン, 浜田寿美男訳「情意関係—情動について」『発達』, 第7号, 1981年, 114頁。(以下「7号論文」)
- (22) Wallon, H., "Le rôle «de l'autre» dans la conscience «du moi»," *Enfance*, 3—4, 1959, p. 282.
- (23) Wallon, H., *Les origines du caractère chez l'enfant*, Paris, 1949, p. 106. 久保田正人訳『児童における性格の起源』, 明治図書, 1965年, 92頁。(以下『性格』と略)
- (24) *Ibidem.*, p. 95 et 96., 84頁。
- (25) 「7号論文」, 117頁。
- (26) 「7号論文」, 114—5頁。
- (27) 木村敏「自己と他者」『岩波講座・精神の科学I』, 岩波書店, 1983年, 参照。

(28) 『性格』第2部第4章参照。

(29) 瀧崎安之助『情感の次元と創造主体』, 創文社, 1975年; 馬場修一「文化」『講座史的唯物論と現代I』, 青木書店, 1977年, 参照。

(30) 「情動を形造る姿勢反応は、情動に自分自身の姿をまのあたりに見せる。」(『性格』p. 103., 90頁)ズレ=距離をうめるための情動=姿勢がかえってズレ=距離を生みだすのである。

トップ=アスリートたちがしばしば自己像幻視, Doppelgänger, つまりプレイ中にプレイしている「自分」を別の「自分」が眺めているという経験を伝えているが、これも自己に内在する距離の顕現として理解しうるのである。そして彼らはその時異常なまでの集中力を発揮しているのである。

(31) 集中力という様態での情動こそ、スポーツの身体の本質というべきもので、これによって人間は自らの運動世界・象徴世界を場に即応して無限かつ多様に組替えていけるのである。

例えば、プレイ中に思いもかけぬ場に直面した時、殆ど瞬間的に『力』Kraft, puissance が身体に充満し、無意識のうちに(言語もイメージも介せず)身体が動いてその場をきりぬけたという経験は誰もがもつであろう。この時の感覚こそスポーツの身体と名づけるにふさわしいものである。この意味に於てスポーツとはすぐれて「即興」の文化というのである。

そしてこれは例えば酒宴の席で会話に興じて、ふっと無意識に口をついてでた言葉が場に哄笑をわきおこした時、その時にわれわれが感じる身体の充満せる感覚と共通するものである。情動も笑いも同じ内臓感覚にもとづく(←Wallon)ことを考えると、この両者の関係は看過しえざるものではなからうか。

この意味に於て私は、スポーツとは「笑い」のメタファとして理解しうると考える。それ故、スポーツが楽しく面白くあるべきであるとする考え(これが学校体育研究同志会の方法であることは言うまでもない)はスポーツの本質をあらわすものといえるのである。

われわれが運動文化の遊戯性の全面的顕現、という時は上の意味に於て理解されたい。

(32) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』, 岩波書店, 1981年, 参照。いうまでもなく、アナグラム研究はソシュールの「記号学」の地平を劈くものであった。その意味において、つまり、運動文化における融合の諸相を把握しようとする意味において、運動文化の「記号学」の可能は存在する。しかし、それが権力への視座をもたぬ限り実践にひらかれぬであろうことは確認されてよい。

(33) Althusser, L., *Positions*, Paris, 1976; Poulanzas, N., *L'etat, le pouvoir, le socialisme*, Paris, 1980.

周知のとうりこの概念は Freud の Verdichtung によるものだが、われわれは Zazzo とともに, Freud の無意識の理説は情動論によって厳密化しうる、とだけここで述べればよいであろう。cf. Zazzo, R., *Psychologie et marxisme*, Paris, 1975. 波多野完治・真田孝昭訳『心理学とマルクス主義』, 大月書店, 1978年。

(34) 万羽晴夫は、共感について論じながら幼児と成人の情動の差異を距離、「分離

- の意識」の有無に求めていることを、補足して加えておきたい。「共感に問われるもの・上中下」『教育』, 第33巻第11号—第34巻第1号, 1983—4年。
- (35) Fink, E., *Spiel als Weltsymbol*, Stuttgart, 1960. 千田義光訳『遊び—世界の象徴として』, せりか書房, 1983年。
- (36) Henriot, J., *Le jeu*, Paris, 1973. 佐藤信夫訳『遊び』, 白水社, 1981年。
- (37) Bateson, G., "A theory of Play and Fantasy," *Steps to an ecology of mind*, New York, 1972, pp. 177—93.
- (38) Wohl, A., *Soziologie des Sports*, Berlin, 1981, S. 67 ff.
- (39) 中井正一「スポーツ気分の構造」『中井正一全集1』, 美術出版社, 1981年, 参照。
- (40) cf. *Esquisse d'une théorie des émotions*, Paris, 1939. 竹内芳郎訳「情緒論粗描」『哲学論文集』, 人文書院, 1957年。Wallon にも同じ指摘がある。
- (41) cf. Gregory, C. J. and B. Petrie, "Superstitions of Canadian intercollegiate athletes," *IRSS.*, Vol. 10, No. 2, 1975, pp. 59—66.
- (42) Elias, N. and E. Dunning, "The Quest for Excitement in Unexciting Societies," Lüschen, G. (ed.), *The Cross-Cultural Analysis of Sport and Games*, Illinois, 1970, pp. 31—51. Elias のスポーツ論については、それが彼の文明化社会論を前提にしている限り、スポーツは補償機能としてしかとらえられず、そのため、彼の細部への着眼がいかに独創的であっても、その人間=図柄観^{フイグチャー}がいかに卓抜なものであっても、そこにスポーツ論の可能性はないことを付言しておく。Vgl. *Über den Prozeß der Zivilisation*, Bern und München, 1969. 邦訳『文明化の過程上・下』, 法政大学出版局, 1977・78年, 特に「まとめ」参照。
- (43) cf. Scheff, T. J., *Catharsis in Healing, Ritual, and Drama*, Berkeley, 1979.
- (44) cf. Kemper, T. D., *A Social Interactional Theory of Emotion*, New York, 1978.
- (45) Ferguson, J. D., "Emotions in Sport Sociology," *IRSS.*, Vol. 16, No. 4, 1981, pp. 15—25.
- (46) *De l'acte à la pensée*, Paris, 1944, p. 134 et 135. 滝沢武久訳『認識過程の心理学』, 明治図書, 1962年, 155頁。
- (47) cf. *The Sane society*, London, 1956. 加藤正明・佐瀬隆夫訳『正気の世界』, 社会思想社, 1958年。

(筆者の住所: 〒186 国立市東2-4 院生寮)